



孫乃凍

中

特別  
^10  
7386  
2



毒乃諫中



善惡乃相<sup>ひ</sup>延々々々。実水と火<sup>の</sup>  
と<sup>を</sup>知れ。依<sup>り</sup>を言<sup>ひ</sup>て自<sup>ら</sup>言<sup>ふ</sup>珠<sup>を</sup>  
何<sup>れ</sup>か。い<sup>ふ</sup>蠶<sup>は</sup>身<sup>を</sup>とこ<sup>ろ</sup>く。人<sup>は</sup>其<sup>を</sup>き<sup>き</sup>  
か<sup>き</sup>て<sup>は</sup>浣<sup>を</sup>木<sup>綿</sup>花<sup>と</sup>こ<sup>ろ</sup>く。ハ<sup>を</sup>き<sup>き</sup>以<sup>て</sup>り<sup>こ</sup>そ  
あ<sup>ま</sup>。麻<sup>れ</sup>衣<sup>を</sup>何<sup>れ</sup>も。強<sup>く</sup>い<sup>ふ</sup>ん<sup>ば</sup>  
ん<sup>を</sup>枝<sup>に</sup>。蘆<sup>の</sup>必<sup>と</sup>い<sup>れ</sup>う<sup>も</sup>。か<sup>は</sup>関<sup>子</sup>  
塞<sup>う</sup>て<sup>い</sup>ん<sup>様</sup>を<sup>い</sup>。蚕<sup>あ</sup>お<sup>つ</sup>ハ<sup>は</sup>代<sup>を</sup>  
馬<sup>頭</sup>娘<sup>の</sup>浣<sup>こ</sup>こ<sup>ろ</sup>や<sup>あ</sup>れ。唐<sup>の</sup>古<sup>き</sup>に<sup>は</sup>。

六東口

親蠶きんさんといふをりて。后きさひの宮手みやではう桑くわと  
あひ。けさくね宮女きやうにょ位いは低ひひゆれと。あ  
まゝあてハ古き史しよえつり。是この皇みかども。  
藉田せきでんの禮れい配はいて。衣食いしょくのキやあうぬと。美  
民みんよあてあめーあありあり。美蚕みさん功こうハ五穀こ  
よとあさくおとろく。才さいと殺ころて世よを救すくふ  
の肉にくと刺さて仇いと鷹とうよと人ひとの佛ぶつ祖その志し  
よも叶かなひ。又身みと殺ころて仁にとあす。聖せいのほ詞ことばも  
ねとめれと。かの明哲めいてつ保身ほしんとあうぬ。そがふ

くくこ起おこる。凡人ふじんといへ。生死しんじの是これ大おほなり。  
とあハてあふ。或あるハ山やまより重おもく。毛けより軽かろし。  
捨すてる度ほどりてたされハ。恥はぢを子こ輩はいの後のちは。捨すてる  
捨すてまじきか捨すてるも。其その理ことりよ。違ちがひぬ。ハ同おなか。  
かの愚おろハ。あふとらき。争あらひとあて。益えきと  
形かたちよ命いのちを。又男女なんにょのみ。さうと。  
せん。海うみなる。よ才さいを沈しずめ。さひまあぬ。あふ  
又あふ。蚕かいの。性しやう極ごくめて。蚕かいの。  
そのよて。是これを飼かひふ。物ものよ。あやかりて。形かたちを



腹育はくいくとあり。腹育化して蟬せみとなつて。王充わうぢゆうが  
論衡ろんぺいより一傳いつでんは蟬せみのなりたるはかゝる胡蝶こてつふ  
かゝるをなり。されど高きま居て清きと乃すなはじ。  
いさぎよく行ひて。胡蝶こてつのむさぼりて耻はぢを知  
づると。べと斗たうはあいる人。されば唐たうの侍中しちゆうと  
官人ハ。さうとて蟬せみと造つくり。別べつのかざりとなす  
と。汝みづか揉みふ似にんとと出るやとかや。又晋しんの陸りく子  
龍りゆうを。蟬せみ西王母さいわうぼのりともわらふなり。さうば世  
おも人もいふやうなれ。なほさうよふともあるむ

巨の<sup>さか</sup>竿又熱くくく童はうきざんを結ひ  
束る。糸とてはなぎ又ハナキ花又押花とす。  
或は情なきかすのときおもねく採り求ぬ。  
何れもき目又通こりこそなり我々ハ人み  
えまれなる。飽よむ暖衣て才を給ふ也  
阿ふいそ暇あり。かる災又けり候。天を  
清心ハ常あり。只よき人なくあらま。古き  
詞ものつたりなりや。釋氏の所記過春の因果と  
しやや阿へん。身又災をとるにいなきものと。

沙白く思ふべし。あまのつねはくぐりぬぐひ  
けり。あまのつねはくぐりぬぐひ。あまのつねはくぐりぬぐひ。  
に未だそのつねをみらる。人も物も心むさかり  
なり。あまのつねはくぐりぬぐひ。あまのつねはくぐりぬぐひ。  
清くいさぎよしのつねのふりみえん。あまのつねはくぐりぬぐひ。  
悪しきもの。あまのつねはくぐりぬぐひ。あまのつねはくぐりぬぐひ。  
皆かくのど。あまのつねはくぐりぬぐひ。あまのつねはくぐりぬぐひ。  
位もな。物を教る職もあまのつねはくぐりぬぐひ。あまのつねはくぐりぬぐひ。  
いづれ。あまのつねはくぐりぬぐひ。あまのつねはくぐりぬぐひ。あまのつねはくぐりぬぐひ。





其言也。やものめひ。又山人を惡むと云ふ。其  
言也。もゆりある。今ゆらあるものをいへば。皆  
は聖の初よりむらり。そ笑さるるものとむへる  
す。やものめひ。世をいひ。保を悪むといひ。深き  
山。遠き境へもいひ。おと志を害す。誰り  
得てめと害やむ。然る今も近き庭に指し  
あへて。朝あ夕あけき。訴ふ。そあき海あり  
何るようありん。思ふ。世は皆終る。家あり醒  
る。物皆濁り。我れひとりありるなどの述懐あり

なされ。ぬと頼ひ英なる人きんも。何なか  
りま。耳をかみ申され。さういふ。ぬと頼ひ  
ぬ。耳より。いふさう。汝を助けをむ。もの  
ぞ。ちの為何し。あんと申。なり。辨へなき。時  
あき鳥をか。いひ。ぬを殺して。枕をあくる。事  
へ。きと。鳥のあきま。ぬと求む。聲をこ  
や。何り。人。いふ。汝。吾所を。切。ん。実。ハ  
禍の門。なり。を。や。ま。唐の古き史を。これ。ハ。汝  
が。頼。極て。多。い。人。が。ハ。な。い。い。ふ。と。れ。れ

と。世。ふ。處。一。災。を。ま。ぬ。ふ。才。く。御。なき。は。先  
王。さ。さ。ハ。縁の災。の。か。を。ぬ。も。み。づ。く。と。り。道  
形。素。は。あ。る。縁。ど。是。ハ。頼。ち。る。理。る。き。ハ。燈。誠  
た。方。ふ。と。何。り。る。人。の。中。も。極。て。あ。る。れ。ハ。ら  
切。り。出。ふ。あ。り。る。何。も。され。火。入。て。を  
危。け。こ。あ。り。つ。を。あ。さ。う。や。い。何。も。さ。さ  
以。火。桶。を。抱。き。店。へ。入。り。火。の。の。る。す。み。え  
あ。る。と。され。何。や。ま。し。て。火。よ。ふ。さ。さ。火  
あ。る。と。き。理。る。と。何。ふ。り。き。ま。人。を。ま。る。と

ようて故梨。水は入てハおぢ也。河脈ふぐを流るも  
 ハ毒ヲ何うかとも。阿多秘く世よあやうきと  
 あること。是ハおぢ也。毒ノ阿々如今ハア  
 らまハバ、わしもさあんと頼む方阿うて。その  
 災ハ何れもの世に降る。物と強し。人と病  
 るるのみ。阿多秘ぬれ。きひきあきらま  
 阿多りあとし強し。是をあきらむ。ちまたど  
 かゝるもの阿うてもあがし。天地の細なると。  
 こころ阿多かれぬもあやハ。かろまざ。家々

どくありんふ。諸々かゝることをするもの何  
らん。さきバ大方は物をよくある。あつた其  
品こそ何れ。あつた。又よ。物さふとも。よく  
あり。辯人<sup>辯人</sup>こそ。何れより。其れ。是を。物  
乃。思ふ。あり。と。さ。む。と。何れ。思ふ。の。長。く。を。成  
る。か。多。程。ふ。極。て。を。ろ。う。る。人。と。い。へ。火。又。入  
て。い。や。け。こ。う。と。い。ふ。か。と。あ。う。さ。り。い。な。い。う。  
い。ま。じ。や。物。さ。む。う。と。い。ふ。か。と。あ。う。さ。り。い。な。い。う。  
あ。う。す。後。ゆ。も。物。さ。む。う。と。い。ふ。か。と。あ。う。さ。り。い。な。い。う。

もふ。あ。う。さ。り。か。は。物。さ。む。う。と。い。ふ。か。と。あ。う。さ。り。い。な。い。う。  
あ。う。さ。り。か。は。物。さ。む。う。と。い。ふ。か。と。あ。う。さ。り。い。な。い。う。  
あ。う。さ。り。か。は。物。さ。む。う。と。い。ふ。か。と。あ。う。さ。り。い。な。い。う。  
あ。う。さ。り。か。は。物。さ。む。う。と。い。ふ。か。と。あ。う。さ。り。い。な。い。う。  
あ。う。さ。り。か。は。物。さ。む。う。と。い。ふ。か。と。あ。う。さ。り。い。な。い。う。  
あ。う。さ。り。か。は。物。さ。む。う。と。い。ふ。か。と。あ。う。さ。り。い。な。い。う。  
あ。う。さ。り。か。は。物。さ。む。う。と。い。ふ。か。と。あ。う。さ。り。い。な。い。う。  
あ。う。さ。り。か。は。物。さ。む。う。と。い。ふ。か。と。あ。う。さ。り。い。な。い。う。  
あ。う。さ。り。か。は。物。さ。む。う。と。い。ふ。か。と。あ。う。さ。り。い。な。い。う。  
あ。う。さ。り。か。は。物。さ。む。う。と。い。ふ。か。と。あ。う。さ。り。い。な。い。う。



あゝんゐひてやへ侍るゝをあらわれ。けみ  
は夕能ぬへ才もおもひ。かゝち化りゝく  
出立。山野水子れ買ふ。何なびくの一むさ。ま  
ろの無常迅速の理うと。思ひさちむる今り  
足とらん。いふ計あらうも。さうあくも思ふ  
唐り我と。是皆わけりぬの本意をあらぬ  
原。彼何のとりけさるあゝん。是とさうな  
思ふ。生とけさるとの。何さうとりけさるぬとれん。  
人の上壽百歳といふ。九十九を事ふ人をも

そゝ少なり。大方ハ七八十の内外を距りやす。  
さき今七十を過。八十をも超ぬを。長く  
生延々。目出度歌ありと悦び羨む。五十六十  
おもあゝて死ぬれ。何なとてまゝの末の  
歌も何をも。歎きおゝぬ。志ろを人々  
素直三下。筆をもあゝる。かた内名  
臣のとれ。世中いゝもあゝん。今も  
生延々。目出度き終る。いふ。ハ十九十  
もて死ゝらん。いふ計に短く。さうあくも





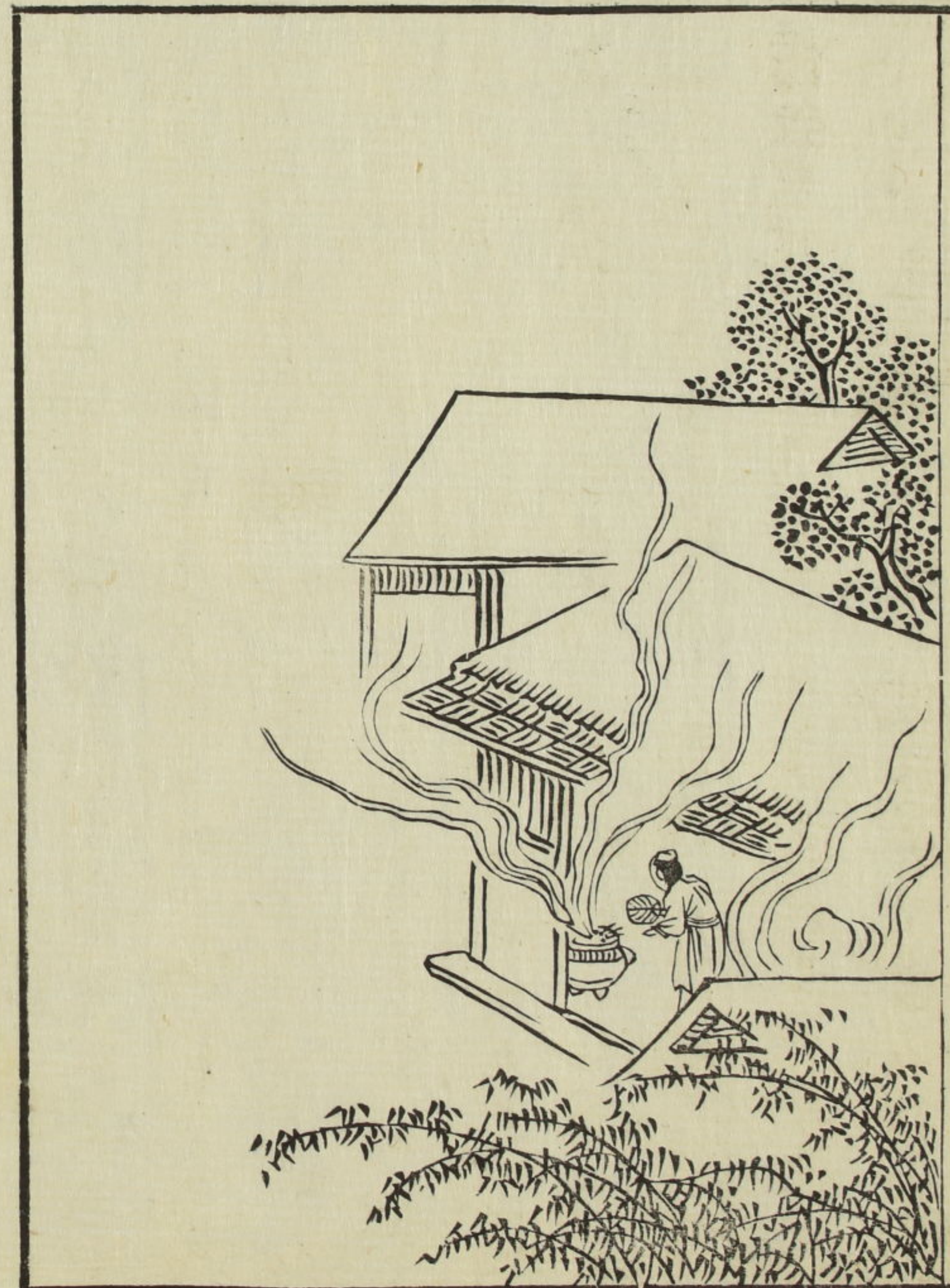
生れありて。又うき悦ひて。死や況や  
人ともれきても。生盲<sup>やうめう</sup>聾<sup>ろう</sup>啞<sup>お</sup>乃。五官<sup>ごくわん</sup>乃用  
急<sup>いそ</sup>もも。又五官<sup>ごくわん</sup>備りて。襁褓<sup>きやうほう</sup>を失す  
て死するも多し。されば人界<sup>じんがい</sup>の生を信。五  
官具足して。襁褓<sup>きやうほう</sup>と免<sup>めん</sup>也。成人<sup>じんじん</sup>といへば  
又うきあつて。びくびく。死や。死を姑<sup>なほ</sup>くとも  
有難<sup>ありがた</sup>し。死ひうきを。うきあり死乃  
いふとや。が。こ。い。え。ん。愚<sup>おろ</sup>なり  
とや。い。え。ん。世乃人<sup>よのひと</sup>も。う。い。え。ん。邪<sup>よこしま</sup>なり

王族<sup>おうしやく</sup>あり。諸<sup>しよ</sup>心<sup>しん</sup>の所<sup>しよ</sup>あり。ぬ。り。お。こ。ぬ。り。  
人<sup>ひと</sup>をのこ。つ。が。才<sup>さい</sup>の強<sup>かう</sup>と安<sup>やす</sup>と。の。い。え。ん。  
此<sup>こ</sup>義<sup>ぎ</sup>の望<sup>のぞ</sup>み。は。あ。く。か。う。う。佛<sup>ぶつ</sup>書<sup>しよ</sup>の教<sup>かう</sup>も  
あ。て。生<sup>せい</sup>死<sup>し</sup>の事<sup>こと</sup>大<sup>だい</sup>なり。死<sup>し</sup>脱<sup>だつ</sup>王<sup>わう</sup>。々。あ。も。生<sup>せい</sup>  
死<sup>し</sup>事<sup>こと</sup>大<sup>だい</sup>なり。と。い。へ。ん。な。ま。な。う。い。え。ん。  
求<sup>もと</sup>め。ぬ。き。は。却<sup>しか</sup>て。迷<sup>まよ</sup>ひ。ぬ。き。も。う。い。え。ん。  
生<sup>せい</sup>老<sup>らう</sup>病<sup>びやう</sup>死<sup>し</sup>時<sup>とき</sup>を。ま。は。り。の。装<sup>そう</sup>晋<sup>しん</sup>公<sup>こう</sup>乃。一<sup>いつ</sup>悟<sup>ご</sup>也。  
肝<sup>かん</sup>要<sup>やう</sup>あり。い。え。ん。き。も。強<sup>かう</sup>し。も。生<sup>せい</sup>死<sup>し</sup>乃  
時<sup>とき</sup>を。ま。は。り。ぬ。き。も。う。い。え。ん。い。え。ん。い。え。ん。

忘す置ても。少も約を違へぬものハ。司命乃  
使たり。さき一昨日も。そゝ何ん程ハ。かゝる  
かゝるを。さき。忘るゝ身。を。死ん。て。こ。そ  
何。ま。か。ら。ぬ。さ。き。と。て。公。私。乃。勤。も。  
故。地。ざ。り。は。子。孫。忠。教。も。な。さ。ず。何。ん。ハ。世。の  
貴。人。の。そ。う。も。さ。き。か。た。り。と。て。何。ん。ハ。世。の  
あ。り。一。そ。う。も。さ。き。い。何。ん。ハ。今。何。ん。ハ。何。ん。ハ。  
こ。う。か。ら。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。  
何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。

其。抱。び。こ。も。あ。り。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。  
こ。と。く。様。牡。丹。乃。富。貴。榮。華。と。さ。き。何。ん。ハ。何。ん。ハ。  
何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。  
何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。  
何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。  
何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。  
何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。  
何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。  
何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。  
何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。  
何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。  
何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。何。ん。ハ。





是よりこのり。代々の詩人文士。巧をあらそ  
ひ。思ひへきさまらなく。すけふね置る中  
に。六居士乃。憎蒼蠅賦など。殊に甚  
く。あつてもなるまへ。蜂の思ひへき事。今  
文よ。いとも有りなむ。蚊蠅肌とり免。終  
に。いねやうむ。莊子も。見ゆ。俗士の  
なべて。知事。王閔。蚊子賦。歐陽  
憎蚊の詩。皆蚊乃。思ひ。救く。と書傳へ  
る。か。中。憎。蚊。の。強。の。と。人。乃。あ

まねくあめもよもいふ。何となくこそ罪は  
穢れも掻くすかき。さきハワシ今蚊の罪  
乃のこれよりかき人何々。さきを天下の額  
はさる。夫穢れのとさき所ハ汚を汚し。  
白きを汚して黒くする。黒きを汚して白く  
かる。物の白黒をみぐるものなり。人  
人の善悪をみぐるものなり。清淨ハさき  
さきも是ハく。おれ借る人ともさき  
まね。穢れのなり。神といふ。乃ともあかん。穢れの  
まね。

何のまねもいふ。さきも穢れものなり。  
さきも人かき。穢れいふ。血をさき  
さきもさきも。さき一間のさき。二  
四のさき。ひく。伊程れなや。何ん。蚊の  
こと。これハさき。蚊の内より。つら。二  
入ぬ。七人の軀。是ハ。安う。況や  
数の多き。穢れも。さき十倍。さき。夕暮  
ト。軒窓のぬ。何のまね。さき。おび  
く。蚊の聲。雷をさき。さき。さき。

だ。くもくろきと。散走火を扇き。あ耶うり懸  
 と。おもはぬ涙こぼれ。或はむや返りくろき  
 と。煙らぬ勢。けぼろ。一宿のぬへ。驅出。障紙  
 き。かゝる。志づ。心あく。見ゆ。署さ。へん  
 き。又。障紙をぬ。やど。集り  
 ど。む。聲。あ。皆。園の。破。走  
 る。計。前後。打。を。を。い。を  
 心。げ。な。さ。く。安。人。打。む  
 心。ぐ。ぐ。い。斗。る。ん。か。後。散。へ

這入一重のくさしものをと。金湯のかくゑんとくさし  
 ぬき。お文人あつたきとあつたひ。四面は燈歌  
 残聲。耳に入てあきまじく。枕お安き夢も結  
 ば次あつたすきまあられ。心うて類をいざあひて  
 忍ひ入。いよげふ歌うちうひて。耳のちとりをと  
 わさぬいとから。さきや今こそ目の上をとと  
 ぬき。ちとあげておとけ。あひすもあひす  
 の傍より。おをかうてあひす。せん方るれき  
 超より。紙船とありて。あきとありて。一重



箕躍おとうて氷より上り。毛寶けいく星。陸機りくきく大々と  
を。あつたの人にもよく知るるなり。虎ハ獸の中まで  
心をお終はしきものなり。揚香やうかうく孝かうに感かんじてハ  
尾とくまで新しんをかり。劉琨りゅうこんが政せいに勉めんでこを。  
河を渡りて他郡たこんに公こう。鴉あハ鳥の中まで貪おんり  
て情なきものなり。曾子そうしの孝を感かんじ。又  
顔高げんこうく庭よりあり。外甥がせう魚の忍しのじきも。  
昌黎しやうり文ぶんに語ごをひる。免めん。露賊ろそくの害大なり。  
潁川えいせんの境よりさる例も有り。呂敏りょみん斗とハ

か多おほく辨はんする。齊せいの桓公げんこうの國を治め給ひ。  
石けくこの笑わらき民。其のねが故帳こてうもるきき  
いふくはくしん。我われに艱難けんなんをあらはし  
んとのはひ。碧羅へきろの紋帳もんてうをあらはけ給ひ  
ぬ。昔むかしや。是こゝに延喜えんき乃すなはち。さききあり  
市衣しえ改かへぬ。勢せいはひ。と倭漢わかん同軌どうきよりて。ん  
なき。とひきも。ねど。是こゝを感かんぜしんや。  
あつた。はは時より。故帳こてうのなきを幸  
ひりて。新しん桓公げんこうにさる。治ちひ。昭しょうのりきく。

はか多し。桓の肌よりわくく。故に。  
劉白<sup>アキマキ</sup>流苑<sup>サラエン</sup>不<sup>レ</sup>記<sup>ス</sup>を也。又これ等の事をも  
して何れを以て知<sup>ル</sup>。二十曲孝子の内。吳猛<sup>コウマウ</sup>と  
いへるあきかき。其父の病しく。蚊帳をかくて  
臥せり。蚊はいつかふも。蚊ふかす。蚊は  
とり。其身一<sup>ひと</sup>の衣と脱<sup>ぬ</sup>き。父の傍にあり  
びや。蚊は。是<sup>こ</sup>の父をさす。蚊は蚊のあが  
才<sup>さい</sup>の。さす。父は。蚊は。蚊は。蚊は。  
蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。

ちもて。わく。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。  
蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。  
蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。  
蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。  
蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。  
蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。  
蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。  
蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。  
蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。  
蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。蚊は。

其は汝るべし。凡の系とを教へるがらん  
は、湛園の竹を伐るも。ぬが罪ハ罪  
はくもきし。さきや世とのえ及ひや。よ  
ぬ中ふ。汝は似る人も多し。それといふ  
や

露の凍中

